

第8章 附属学校園

第1節 附属小学校

1 略 史

(1) 敗戦からの復興

昭和20(1945)年8月2日、B29の空襲によって富山市街全域は焦土と化した。いわゆる富山大空襲である。明治10(1877)年12月以来の伝統をもつ附属小学校(当時は附属国民学校。以下、本校と略称する)は師範学校とともに全焼し、その施設の大半を失った。多くの児童は疎開していたが、市内に残っていた2名が死亡した。終戦をむかえたとき、子供たちには戻るべき校舎がなく、しばらく自宅待機とするほかに方策はなかった。

9月、幸いにも焼け残った雨天体操場を仮教室にしつらえて授業を再開した。校舎の焼失から、青空授業や二部授業を行う市内の公立学校に比べれば、本校はまだ恵まれた方だった。しかし、疎開児童が逐次復校するにおよんで、校舎の狭隘と施設・設備の不足は日を追って増すばかりであった。とりあえず、西田地方の仮校舎に1・2年生を残し、五福の旧連隊第三大隊雪中演習場を改装し、3年生以上を移転させた(昭和21年9月)。やがて1・2年生も収容し得るようになり、附属小学校は事実上、西田地方から五福へ移転した(年月不明)。

この間、米国教育使節団報告書、教育刷新委員会の論議を経て、昭和22(1947)年3月、「学校教育法」が施行され、戦前の勅令主義を廃して学習の機会均等を制度として整備した単線型梯型学校体系、いわゆる6・3・3・4制が誕生した。この学制改革により、新たに「附属中学校」が創設されたが、本校では高等科が廃止され、校名も「富山師範学校男子部附属国民学校」から「富山師範学校附属小学校」と改められた。

戦後改革期、教員養成についても大きな見通しが

なされる。教育制度委員会の方針として、「教員養成は大学で」という理念が明らかにされていく。それを制度化したものとして、昭和24(1949)年、教育職員免許法が施行され、これを契機に師範学校もまた大学昇格への動きを強めて行くことになる。こうして、本校は昭和24年の「富山大学富山師範学校附属小学校」を経て、昭和26(1951)年、「富山大学教育学部附属小学校」と改称された。しかし、施設面での改善はほとんど見られず、相変わらず劣悪を極めたままであった。

この年、五福地内に同居していた附属中学校が五艘の地に移転することになり、その2教室を得て渡り廊下を付けた。広くはなったものの、国庫財源の不足から雨もりの修理、床板の張替え、照明設備の補充すらままならなかった。PTA広報紙『ふたばだより』(昭和26年12月発行)には、次のような記載が見られる。

附属小学校は今年(昭和26年)の四月から富山大学教育学部附属小学校として発足していくことになりましたが、現在の所、大学の方の校舎や施設の充実のために小学校の校舎は昭和二十八年までは建築計画がなされて居らず、御承知のような校舎で児童たちにとって非常に不幸なことであり...(以下略)

公立学校が計画的に復興していく中、附属学校の校舎改築が立ち遅れたのは、国家財政の窮乏に加えて、その廃止が論議されたためでもあった。

すなわち、戦前の附属学校は師範学校と機能的に一体のものとして運営され、教育実習校としての役割以上に、地域の公立学校に対して「教育の本山」とでもいうべき、教育実践の先導的立場を担っていた。そのような特権的な存在に対して、戦後は厳しい批判が加えられ、市内公立学校を附属学校として利用する案が検討されていたのである。富山県教職員組合は、富山市内に附属学校を設置することは学区制を乱し、他の諸学校と全く別の優越感をもたらすことによって、教育民主化の本質にもとるとして、

全面解体の立場をとった。そして、大学や市当局に対し、市内の公立学校の中から附属を選択指定することを求めたのであった。そのため、安野屋小学校や西部中学校など、具体的な名も挙げて検討されたが、富山市の経済的負担が大きくなりすぎることなどから、結局は文部省の了解を得るに至らなかった。

(2) 五艘での新築

一方、本校校舎の荒廃は日増しに加わり、大学の施設委員会も「腐敗の度が著しいため秒速20米位の強風の場合は倒壊の危険なしとせず、降雪多量の場合の時に於ても同様である」(『附属小学校百年史』昭和52年11月刊)として鋭意文部省との折衝を進めた。文部省側も、五艘の中学校敷地に建築する方向で検討を始めた。しかし、新校舎建築には、五艘の敷地を約2,000坪程度を拡張する必要があった。昭和27(1952)年6月より、大学、保護者など本校関係者が奔走し、ようやく文部省の積極的な支持を得て交渉の結果、昭和28(1953)年12月20日、附属中学校東側隣接の民有地1,421坪の買収に成功した。坪当たり1,200円であった(同上書)。

昭和29(1954)年12月24日、本校は五艘に移転した。移転といっても、附属中学校の新築により残された旧校舎を改築しての移転であったため、施設・



校章

設備の不十分さは免れなかった。移転後の数年は、学校と保護者が一体となって大学側に陳情し、またPTAである「ふたば会」が奉仕作業をするなど、こ

れまで以上に教育環境の整備に力が入れた。

昭和30(1955)年以降の、主たる施設・設備等の整備状況は次の通りである。

昭和30年 給食室増築。校舎西半分の改修。宿直室・作業員室・廊下等の新築。児童出入口完成。

昭和31年 運動場の地ならし。鶏舎・小鳥小屋・実験池・はん登台・回旋塔等の設置。

昭和32年 各教室に電気時計設置。特別教室(音楽室・図工室・準備室等)150坪の竣工。



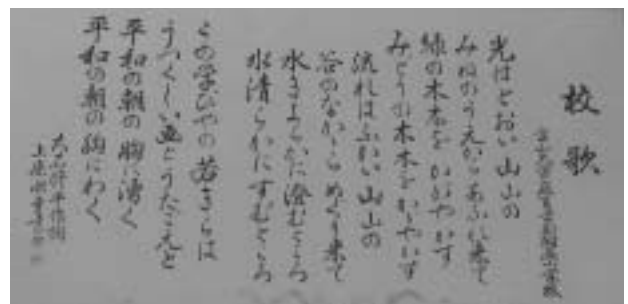
校旗

昭和33年 体育館・廊下等180坪竣工。会議室・理科室の模様替え。放送室設置。

この間には、加えて本校の新しい二つのシンボルも誕生した。

一つは、昭和32(1957)年1月20日の「新校旗の樹立」である。それまでの校旗は、明治42(1909)年9月に作られたもので、周りが紫の房、中地が朱で、中央に稚子桜の記章と師範学校の「師」の一文字が縫い取られていた。戦後10年以上を経て、一時衰退した国旗や校旗に対する関心も高まり、新しい附属小学校にふさわしい校旗をとという願いが実現したのである。

もう一つは、昭和34(1959)年11月3日、新しい校歌が制定されたことである。「光は とおい 山山の」と題して大石修平が作詞、団伊玖磨が作曲したものである。披露会当日、団伊玖磨自身が指揮して、全校児童が感激のうちに歌った。



校歌

こうして、本校の教育環境は徐々に整備されていった。

そして、現在の鉄筋コンクリート校舎は、昭和40(1965)年9月起工、翌41年3月に竣工された。昭



現校舎の新築

和20（1945）年8月に校舎が焼失して以来20年、永久建築を夢みつつあったのがついに実現したのである。

ここに、ようやく本校の戦後が完了したと言えるだろう。また、これが附属学園総合建設の端緒ともなった。本校百年史（上掲書）には、新校舎を次のように紹介している。

新校舎は、総面積2,706平方メートル鉄筋三階建て、子供たちの教育を第一に考え、管理棟は最小限に縮小した。正面玄関は児童用、教官用、来賓用を兼ね、できる限り広い面積をと、校舎に入っただけの第一印象を落ち着きのあるおおらかな感じを与えるものとした。

正面に広い壁面をとり、美術品の展示もできるよう考慮した。玄関をぬけて裏庭への出口、傾斜をとったセメントたたきに水を流し、歩きながら足を洗えるように工夫されている。

また、校長室は、応接室や会議室も兼ねられるように、せまい面積の中で苦心して広い空間をとった。宿直室の炊事設備、教官室横の放送室や印刷室、湯沸室なども狭いスペースからの苦心の結果である。視聴覚教育に関しては、校長室を放送スタジオとして利用し得るように、また、音楽室や理科室からも校内テレビ放送ができるように配慮された。

終戦後の20年間、五福の旧兵舎への移転・改装、五艘の中学校の空き教室への移転・改装を繰り返してきた本校にとって、新校舎建設の大きな喜びは、この記述からも十分に感じ取ることができる。

2 教育研究活動の展開

（1）教育研究の再開

終戦後の本校の授業再開は昭和20（1945）年9月であったが、前半は高等科と高学年の一部の児童が登校したに過ぎず、全校児童が揃ったのは10月も遅くになってからであった。教材もほとんど焼失し、教官の努力で補う毎日であった。しかし、本校ではこうした中、昭和21年度に入って早くも教育研究活動が再開されていく。

まず、校内研究紀要『教育論叢』をガリ判印刷で出版（4月創刊）、続いて5月には第1回の研究協議会を開催した。本校校舎は研究協議会開催に耐えるようなものではなかったため、戦禍をのがれた県内各地区の学校へ本校教官が出かけての協議会開催であった。協議会場は、県内を四分分割して設けられた。

5月24日 田中校（下新川・中新川対象）

同 30日 速星校（上新川・婦負・富山市）

6月15日 福野校（東砺波・西砺波）

同 22日 放生津校（氷見市・高岡市・射水）

午前は附属教官の実地授業、午後は部会協議および全体会となっている。

教育現場は混乱していた。昭和20年の秋から暮れにかけてGHQ（連合軍総司令部）から、次のような4つの大きな司令が発せられていた。

第一は、「日本教育制度ニ対スル管理政策」（10月22日）で、占領下の教育政策の基本方針が示された。

第二は、「教員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」（10月30日）で、教職員の適格審査を行うこと、および軍国主義者、超国家主義者の教職からの追放を命じた。

第三は、「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」（12月15日）で、神道の国家からの分離、神道教育の廃止が行われた。

そして第四に、「修身、日本歴史及ビ地理停止ニ関スル件」（12月31日）で、修身、日本歴史、地理の授業停止と、これら科目の教科書の回収廃棄がなされた。

またこれら以外の教科についても、戦時教材等の

省略、削除が文部省から指示された。いわゆる「墨ぬり教科書」が出現したのである。

翌昭和21(1946)年3月には、米国教育使節団報告書が出され、新しい教育への道が示された。

こうした中での、本校教育研究協議会の開催であった。

昭和22(1947)年からは、バラック校舎の中で教育研究発表会を再開した。特に22年・23(1948)年における附属小学校の研究は、県内小学校の指導的立場にあることを自覚した、先導的なものであった。以後、本校教官は、教育内容の充実と革新、新たな学習指導法の導入等に努力して、県内各地の会場にも出張し、それぞれの研究結果を発表したり、模範授業をしたりするなどして、附属学校の高い教育水準を示したのである。

昭和22年、復刊『研究紀要31号』を発刊して以来、昭和29(1954)年までに紀要の刊行は7冊を数えた。

(2) 教育実践研究のあゆみ

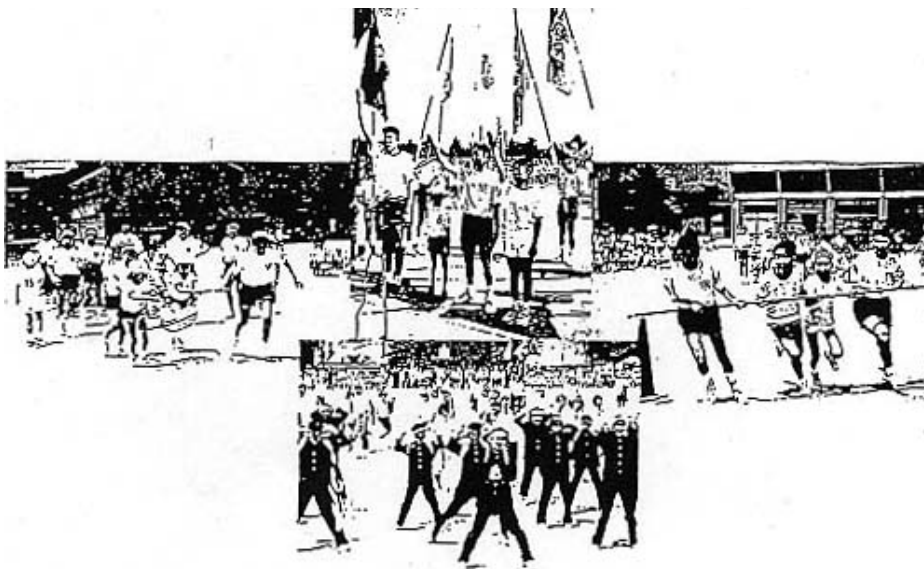
「人間形成と各教科の指導」から「学ぶ力」へ

昭和25(1950)年から7年間続けられた「児童の発達と学習指導」の研究によって、一人一人の児童の理解力や技能の高まりを、その成果として得ることができた。だがその反面で、人格全体の統一と完成という観点からは、その有機的な要素となり得たかという反省も出された。

そこで昭和32年度からは、研究主題を「人間形成と各教科の指導」とし、各教科の指導を通して、どのような人間像を描き、それに迫るかを研究の対象とした。折しも昭和33年版の「学習指導要領」が示され、教育の現代化の波が教育現場に押し寄せるに至り、本校の研究も教科指導に力点が移っていく。昭和35(1960)年までの4年間の研究で、「創造者をつくるための教育」が次第にテーマとして意識されていくと共に、昭和36年度以降は、「学習の深まりとその構造」、「学習課題の分析とその構造」、「学習課題の組織化」などと深化していった。それらの副題として掲げられた「意欲的な学習と系統性」(昭37)、「教科の本質をふまえた主体的な学習」(昭39)といった言葉からも、「創造者を目指す教育」が系統主義的な教科の指導を通して行われていたさまをうかがい知ることができよう。

これらの研究から、「学力とはどんなものか」、「どのように変容すればよいのか」、「本当に生きて働く学力ということができるか」、などが問題にされるようになった。そこから、「人間としてより充実した生活を取り上げていく力」、あるいは「子供たちが自分で自分を変革していく力」を育てようと考えるにいたった。

そこで主題として取り上げられたのが、「学ぶ力を育てる」ということである。この研究の指導的立場にあった森 昭(大阪大学教授)は、次のように回想している。



附属学園合同運動会 上：選手宣誓(開会式)
 左：小・中・職「球(急)患だ、急げ!」、右：小・中・職「台風の目」
 下：「応援合戦」(『学報』第377号(昭和48年6月発行))

本校の教官諸氏が《学ぶ力を育てる》ことが現代教育の基本問題ではないかという実践者としての確信をいだきながらも、しかし理論的にはたして間違いはないだろうかという不安をもっていることを感じ取った。しかし同時に《学ぶ力》という耳新しいことばを聞いた瞬間から私は多大の興味をそそられ、これは考えてゆけば重要な問題に突き当たりそうだと直感した。それは私の探求心をそそり、本気で取り組んでゆけば、なにか豊かな実りが引き出せる 大きな ではないかと思えたのである。(『学ぶ力を育てる 来るべき時代の教育を求めて』黎明書房、昭和44年5月刊)

この研究では、学習過程を課題解決過程とし、5つの段階を想定した。そして、そのどの段階でも、「思考」「構え」「感動」という3つの観点から「学ぶ力」をとらえようとしたのである。

前掲の森教授は、本校では「『学ぶ力を究明していく窓』として『感動・構え・思考』の三つを設定している。理論的には問題もあるであろうが、実践者としての経験と観察に基づいた研究のための戦略的な作業仮説としては、かなり有効な観点」であると評価している(同上書)

こうして、研究の成果は『学ぶ力を育てる 来るべき時代の教育を求めて』(黎明書房、昭和44年5月刊)として世に問われたのである。

対話的思考による学習

「学ぶ力」の研究は、さらに「対話的思考による学習」へと発展する。「学ぶ力」の研究では、確かに子供たちは課題解決過程を通して学習しているのであるが、考察を進めると、一人一人の立場にずれがあることが見えてきた。そこで、これを克服するため、一人一人が自由な発想で自分の考えをもち、その上でさらに自分にはないものを友達のなかに求め、互いに吟味しあっていく構えに立てるようにすることに研究を焦点化していく。その結果行き着いたのが、「対話的思考による学習」であった。

ここでいう「対話」とは、「自分の不完全性の自覚と相手が自分にはないものをかならずもっているという認識を前提として、相互に受け入れようとする構えで話し合うこと」である。対話という共同性によって、真理は対話者相互の共有物として生まれる。言い換えれば、人間が他の人間に自分の考えを提起

して、真理へ迫ることができる方法が「対話」なのである。

学習過程は、「事象の観察」「問題の意識化」「問題の検討」「学習問題の成立」「発展的解決」の5段階に分けられる。そして対話的思考によって、子供一人一人に連続的に発展する切実な問題をもたせることができるという考えから、この5つの段階に対応して、「関係的位置を自覚する」ための5つの節、「視点をさぐる」「視点をもつ」「関係的位置の設定・変換」「関係的位置の確認」「問題への取り組み」を設定している。

子供に学習問題が成立することは、この研究の中で最も重要視するところである。それを「関係的位置の確認」の節だと考える。この節に至るためには、子供同士がかかわりあいによって相手とのずれを見つけ出し、その根拠をさぐり自分の考えを変換しようとする。これが「関係的位置の設定・変換」の節である。つまり、節を設定することによって、子供のあゆみをとらえ、その節を通ることで関係的位置を自覚する子供を育成しようとしたのである。

この研究は15年間継続され、その間には『対話的思考による学習』(明治図書、昭和54年6月刊)、『心を開いて学ぶ 対話的思考を深める授業』(明治図書、昭和59年5月刊)、『追究の道筋が見える授業 みずからの問いに立つ子供』(明治図書、平成元年6月刊)の著作が次々と生み出されていった。

追究を楽しむ子供の育成

「対話」による学習を進めるうち、次の二つの面で見直しをせざるを得なくなってきた。一つは、「対話」の意味付けであり、もう一つは対話を生み出し、広く進めていく情意面への注目であった。まず、「対話」そのものの意味付けである。それまで、人と人との間にのみ成り立つものとして、限定的に考えてきた。しかし、これに「モノ(物=教材)との対話」を加えたのである。子供がモノに問いかけ、モノと取り組むとき、モノはその本質にしたがって端的に答え、直接的に応じてくる。たしかにこれも、終局的には、モノを通して「自分との対話」、自分の再認識、再発見することになるのだが、このモノとの対話にも注目しようとしたのである。

次に、情意面への注目である。「対話」での学習

では、自分に欠けているもの、不完全性を自覚し、その完全性をめざして「対話」を進めていくやり方を考えてきた。しかし、そこにはややもすると消極的・否定的雰囲気にとどまりがちなところが見つけられた。本来学習とは、明るさに向かう楽しみな出来事である。この「楽しみ」に注目し、このことを強調しようとしたのである。

このような研究のあゆみの中で、一人一人がとらえていく学習内容や学習の進め方などに、個性的な違いがあることが見えてきた。そこで、その子がもつ「その子らしさ」やこれから獲得していくであろう「可能性」を、「一人一人の子供のよさ」とし、それが生かされることによって「追究を楽しむ」授業が生まれ、「追究を楽しむ」子供が育成されると考えて授業研究に臨んできた。

この研究の成果は、『追究を楽しむ授業』（共同出版、平成6年3月刊）にまとめられた。

3 現状と展望

本校創校100周年記念『附属小学校百年史』（昭和52年11月）の巻頭に、当時の附属小学校長、故・山口政則（教授）は次のように書いている。

百年史を貫く伝統とは、わが先人たちが小学校教員養成の一翼を担うという命題に、その自負と責任を自覚し、先行的実践研究につとめ、常に先達としての道を歩んできたということではあるまいか。その百年のあゆみには、どこにも乱調と低迷の章句はないのである。



120周年記念式典で挨拶をする時澤貢学長
右上は式辞を述べる松井政明校長

さらに平成9（1997）年、本校は創校120周年を迎えた。

教育改革の大きなうねりの中で、教員養成にも教育研究にも新たな流れが生まれている。今こそ私たちは、本校の担うべき役割について内省と決意とを新たにし、この伝統のもと未来に向かって日々努力を続けていきたいと願うものである。

第2節 附属幼稚園

1 略 史

（1）戦後の園の再開

明治20（1887）年6月、富山県尋常師範学校附属幼児保育場として以来、地域の幼児教育研究の中核的役割を果たしてきた富山県師範学校附属幼稚園は、昭和20（1945）年8月2日夜、富山が空襲されたことにより、堀川村にあった園舎を焼失した。8月15日の終戦を迎え、時の師範学校長・伊東法俊は、戦後の荒廃の中での学校運営に腐心し、幼稚園でも一刻も早く授業体制を敷かなければならないことを説いて、教場を求め奔走した。ようやく9月より、富山市の不二越工場の一部を園舎に当てることとなり、街の各所に貼り紙をして離散した園児に知らせると共に、再募集を行って園は再開された。

道具はすべてありあわせのもので、ただ一つ荷車に積んで運び出した「ヒル氏の積木」以外はみんな手作りされた。雨戸をはずしてすべり台を作ったり、先生が馬になるなど、教師自身が遊具の代わりをなしたりしたが、粗末な部屋でも子供たちの活気みなぎる保育が行われていた。（佐倉シゲ談）



作ったこいのぼりを手に（不二越工場の庭）

昭和22(1947)年、「教育基本法」や「学校教育法」が公布され、幼稚園は学校教育機関としての新たな発足を始めた。

翌23(1948)年、「保育要領」が制定され、新しい保育内容の12項目(見学、リズム、休息、自由遊び、音楽、お話、絵画制作、自然観察、ごっこ・劇遊び・人形芝居、健康保育、年中行事)に基づく保育が展開された。本園の青山ヒサエ・志波和子両教諭は、前記12項目の中から附属幼稚園独自の7項目(言語、音楽リズム、絵画制作、観察、新しい習慣、自由遊び、集団遊び)を定め整理した。

昭和23年4月、西田地方へ移転し、師範学校の体育館を附属小学校と半分ずつ使用することになった。

昭和24(1949)年4月には西田地方園舎から五福の旧兵舎跡へ移転し、師範学校附属の3校舎が五福の大学構内に集結した。園舎は殺伐とした旧兵舎跡であったが、周囲の自然環境はすばらしかった。高い樹木が繁り、銀杏の林や、からたちの垣根に囲まれた広い園庭を子供たちは“森”と呼んで、飽きることなく遊んだ。

(2) 附属学園の五福集中

しかしこれも長くは続かず、大学の五福集中計画が決定されるに及んで、附属学園は五福に移ることを余儀なくされた。中学が26(1951)年、小学校が29年に移り、幼稚園は34(1954)年12月、五福村前に新築された木造平屋建ての園舎に移転した。ここに、幼小中が同一キャンパスを形成する附属学園の集中化が実現した。

新園舎は、附属小・中学校に比べて交通は不便であったが、カラフルな窓と赤い屋根のメルヘンティックな近代的な園舎であった。また、周囲の環境は田圃と蓮畑に囲まれ、田圃の新鮮な空気と日光に恵まれたところであった。遠く高山線の汽車と射水線の電車とが行き交うところで、“どじょう”や“ふな”を手づかみしようと追う幼子の保育には格好の場所であり、子供たちは伸び伸びと活動し、樹林の緑に恵まれた元の園舎とはまた別のおもむきがあった。

ここで、いちご摘みや芋掘りなど、園外に出かけて土に親しむ体験活動を多く取り入れるようになった。

た折しも、園舎裏の農家の田圃が休耕田となり、子供たちの野菜畑に変貌した。畑に稔る茄子や南瓜、西瓜などと共に、子供たちの興味と関心も育っていった。やがて昭和43(1968)年には、その土地を大学が購入整地して、幼稚園のグラウンドが誕生した。広くなったグラウンドで、子供たちはボールを蹴るなどして全身を使って遊んだ。

田圃の自然環境に包まれた五福村前での10年足らずの園生活は、子供たちの限りないエネルギーと相俟って、豊かで充実した毎日であった。

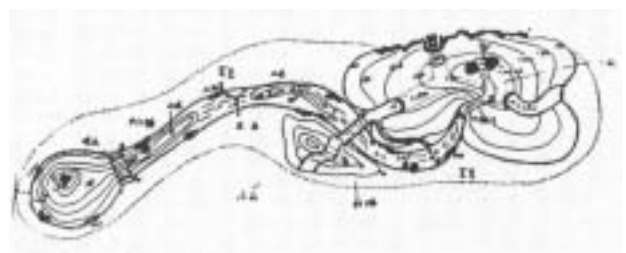
(3) 現在地への移転

大学の全体計画により特殊学校新築計画が決定されて、昭和44(1969)年3月、園舎は現在地に移転した。安定した五福村前を離れがたく、移転反対の動きも強かったが、昭和44年4月25日、新園舎の竣工式を新しく出来た遊戯室で行った。

新園舎は、鉄筋平屋建576.15平方メートル、敷地面積2,993平方メートルの真新しい建物であったが、ビルディングの廃材で埋め立て整地された土地は、草一本生えていない荒地であった。当時の佐々木龍作園長は、五福村前の豊かな自然環境の再現を求め、自然な環境作りを力を入れて、園庭に築山、小川、池などを構築した。また、木登りが出来る雑木林をという願いから、幼木が100本ほど植え込まれた。半数くらいしか育たなかったが、それは今でも緑の



新築工事風景(昭和44年3月)



オアシスを形成している。

施設としての園舎そのものは、当時の文部省の実験幼稚園ということで、設置基準を上回る立派なものであった。やがて昭和47(1972)年4月、学部に幼稚園教員養成課程が新設され、昭和52(1977)年4月からは「3年保育」も開始されて、組数は3となった。

昭和52年11月27日、創立90周年記念式典ならびに祝賀会が行われた。併せて、記念誌『創立90周年』が出版された。これを期に、戦後途絶えていた同窓会を復活させ、「同窓会会則」を制定すると共に『会員名簿(昭和21年3月卒業以後)』を発刊した。

昭和53(1978)年3月、保育室と会議室とが増築された。4月から4歳児が1学級増となり、組数4となった。

昭和54(1979)年4月、5歳児の1学級増により5学級編成の定員132名となった。そのため、従来の遊戯室では狭く不自由となり、当時の大澤欽治園長は拡張折衝に奔走し、昭和54年3月、改築が実現した。ただし拡張には支柱が必要とのことから、部屋の真ん中に4本の太い柱の残る遊戯室が完成した。

(4) 創立100周年の節目

明治20(1887)年に幼児保育場が設置されて以来、昭和62(1987)年で100周年を迎えることとなり、以下のような記念行事が催された。

修了生がレリーフ「附属学園の四季」を制作して門扉に埋め込んだ。今も登園する園児を見守っている。

6月には、当時の中谷唯一園長の指導のもと、うさぎ、ペンギン、かえる、くじら、にわとりとひよこ、かば、ぶたのセメント像7体を親子で作し、除幕式の後、園庭に11軒の模擬店を出して園遊会を行った。

9月、100周年讃歌詩を募集し、17篇の応募があった。永田雅子氏の「たんぼぼ」が選ばれ、学部の渡辺一郎教授に作曲を依頼することになった。

10月、園児の作品と保護者の絵、書、手芸、生け花などを展示した記念作品展が催され、多くの方々に鑑賞していただくことが出来た。

11月、創立100周年記念式典を、大井信一学長の

ご出席をいただき、附属学園共用多目的ホールで挙行した。記念の歌「たんぼぼ」は、グリーンコーラス部のお母さんたちによって披露され、園児は「よろこびの歌」を歌ってお祝いをした。『附幼100年のあゆみ みどり特集号』を発行した。

平成元(1989)年3月、前庭に時計塔「みどりの塔」が完成して除幕式を行った。鏡面の球と2本のポールに支えられ、球は子供たちの永遠の輪を、ポールは伸びゆく未来を象徴し、そこに生活する人々と共にあって時を刻むことを表しているものである。

(5) 110周年に向けて

平成元年度には、園庭をオープン化する工事が始まった。テラス側の壁面を一部撤去し、引戸をアルミサッシに取り替えるもので、その間、3・4歳児は遊戯室で生活した。

平成2(1990)年10月、子供主体のオリジナル運動会の実現を試み、それぞれの競技や遊びを自由に選んで参加することにより、自分たちで作り上げていく主体的な運動会を目指した。

12月、「おもちゃまつり」を「こどもまつり」に一新した。子供一人一人が主役であり、子供の手で作る「こどもまつり」を目指した。

平成3(1991)年、「木の部屋(木工室)」と「絵本の部屋」を開設した。

平成5(1993)年、園のアプローチがカラー歩道に代わった。車道と歩道とを区別し、路面にはチューリップ、あじさい、もみじ、とんぼ、かぶとむし、てんとうむしを描いた。四季を表したものである。また、正面玄関のスペースに、生け花と子供たちの作品を、四季の行事に合わせてディスプレイした。

平成6(1994)年、園長室、職員室、湯沸かし室などが大幅に改築された。新たに保健室が職員室の一隅に設けられ、子供たちの健康や安全に一層配慮できるようになった。子供たちには、小さなオアシスとなったようである。

平成9(1997)年5月から110周年記念の壁画制作に取り組み始めた。学部学生と幼稚園児との共同活動として、学部の丹羽洋介、山瀬晋吾、榎沢良彦各教官と長谷川総一郎園長らが学生を指導した。

9月、保存展示されたままの作品等に化粧台とエッチングプレートを配し、作者が分かるよう整備した。

12月、県立近代美術館企画展「みんなでつくろう'98」に出品するため、いろいろな素材を活かして「ふぞくようちえんのはる、なつ、あき、ふゆ」の世界を演出した。

平成10（1998）年3月、110周年記念壁画が完成した。壁画には、園児が植物のようにしっかりと地域の大地に根っ子を張り、大樹のように太り、キラリと輝いた夢のある実を付けて欲しいという願いがこめられている。

（6）PTA活動

「みどり会」の発足

昭和29（1954）年にPTAが発足して「会則」が制定され、本会の名称を「みどり会」とした。役員は、会長・副会長の他に理事若干名で組織し、理事は総務部、教養部、保健体育部、広報部の4つの部会に分かれ、園の運営を助ける補助的な役割を担うこととした。本会の事業には、会員相互の親睦と教養を高めることを目的とする事項が加えられ、各部の企画により諸活動が積極的に進められるよう配慮した。現在では、男女共同参画のPTAを目指しており、女性会長のもとで活発な活動が展開されている。「父親の会」も、年に数回ほど開かれている。

機関誌『みどり』の創刊

昭和42（1967）年、広報部の活動として、附属幼稚園の教育活動の足跡を記録に残し、また会員相互の理解と融和を図るために、会誌の発行が提案された。会の性格や内容の検討、紙面の割付けなどに、数カ月が費やされた。公募された会誌の名称は、いずれも愛情豊かな希望に満ちたものであったが、その中から、みどりの新芽、若木、みどりごなどのみずみずしいイメージが、園児の遊ぶ園にふさわしいということで、PTA組織の名称そのままの「みど



PTA機関誌『みどり』

り」が選ばれた。会誌は現在、第94号まで発行されている。

「園歌」の制定

昭和44年の園舎の移転・新築に際して、当時の佐々木龍作園長は、「園歌」の制定を強く望んで理事会に提案した。理事会の賛同を得て、歌詞は「みどり会」会員より募集することになり、教養部を中心とする「歌詞制定委員会」の検討の結果、笹倉修氏の作品が選ばれた。作曲は、学部の大澤欽治教官の支援を得て、中田喜直氏に依頼することができた。昭和44年3月、園歌の披露会が行われた。

専任園長の誕生

戦後の附属幼稚園長は、附属小学校長との兼任とされていた。昭和53年、学部に「幼稚園教員養成課程」が新設されたことに伴い、附属幼稚園長も専任として選出されるようになった。

2 教育研究活動

戦前よりの先輩諸氏が教育研究活動を重視し、時代の変遷を反映させつつも、一貫して新しい「幼児保育」の在り方の研究と普及に努めてきた伝統は、今日まで変わることなく受け継がれてきた。

昭和28（1953）年、「富山県幼稚園協会」が設立されると共に、本園が事務局となり、県下の幼児教育の発展に深くかかわることになる。昭和29年には、青山・志波両教諭が県下で初めての公開研究保育を行うなど、幼児教育推進の中核としての実績が積み重ねられていった。

昭和32（1957）年、幼・小・中の一貫教育を目指して、第1回の幼小中合同教育研究協議会が開催された。以後、昭和35年までは、附属学校園の『研究紀要』も合同の研究誌として刊行された。やがて昭和36（1961）年、幼稚園単独の『研究紀要』第1号が発行され、独自のテーマで研究を進めることになった。

その研究テーマや研究内容は、およそ次のようなものとして集約される。

（1）「人間形成をめざして」

（昭和32～36年度、「研究紀要」第1号）

「人間形成と各教科の指導」のテーマのもとに、

幼小中合同の上記の研究協議会が開催された。幼稚園においては、一貫性教育の基礎としての幼児教育の位置付けの深化に努めた。

内容は、次のようなものである。

- ・ 幼児の社会性を育てることや、人間形成の前提となる生活指導に重点を置く。
- ・ 幼児の科学的思考の芽生えを育てる。
- ・ 音楽リズムの指導に取り組む。

(2)「基礎的な態度の育成をめざして」

(昭和37～39年度、「研究紀要」第2号～第4号)

幼稚園生活の充実を目指し、幼児に必要な基礎的態度をどのように育てるべきかを追究した。

- ・ 言語指導における望ましい環境の整備と、豊かな経験を積み重ねる。
- ・ 体育的遊びを通して、「幼児の性格形成、遊びの創意工夫」が高められるよう、施設の充実を含めて探究する。

(3)「自主・自立をめざして」

(昭和40～45年度、「研究紀要」第5号～第10号)

依存と独立のはざまに成長する幼児期に、自分で生きる意志と能力を持つ主体としての人間となるための自発性を育て、自立の態度を養成する手法を考究した。

- ・ 幼児の自立を願う時、自発性の元になる興味・関心が重要な意味を持ち、心を集中して取り組むことが思考力の芽生えにつながると考え、興味・関心を高める指導の手立てを追究する。
- ・ 幼児がものに取り組む意欲や根気についての考察から、自立の態度の確立を目指す。
- ・ 自発性を助長する望ましい施設設備の在り方を追究する。幼児の意識や態度、施設設備の使用状況などの調査に基づき、よりよい活用と改善の方策を探究する。
- ・ 自発的に遊び、たくましい心身を形成するため、戸外環境の適切さを検討する。

(4)「生活の豊かさをめざして」

(昭和46～51年度、「研究紀要」第11号～第14号)

幼児の生活の充実を求め、言語や数量にかかわる創造的活動に視点をあてて追究した。

- ・ 幼児期は言葉の増える時期なので、言葉の指導を正しく行うことが重要である。言語能力の基礎を培うと共に、言語生活をより高めることに焦点を当て、行動から態度にまで深化する指導の在り方を検討する。
- ・ 幼児の創造的活動や言語活動などの分析の過程で、その活動の高まりを助長する一つに“数量的要素”があると考え、幼児の生活や遊びの中に見られる数量的意識を高める手法を考案する。

(5)「自己実現をめざして」

(昭和52～61年度、「研究紀要」第15号～第19号)

幼児の生活のより豊かな充実を求め、表現活動を高める方策を追究した。

- ・ 幼児の表現活動を豊かにするための素材の見直しと活用とを考究する。
特に、「自然の素材」とのかかわりを通して、子供たちの「解放感と心の安定、より深い感動体験と共感、好奇心と創意工夫、よりたくましい行動力、思いやりと辛抱強さ」が育成されることを企図し、園外の自然へと保育空間を広げる実践の展開を考案する。
- ・ つくる活動(造形的)を通して「意欲的に取り組む態度、創意工夫する力、素材や用具を扱い使う技術・技能、ねばり強く取り組む態度、望ましい友達関係」の育成を考究する。
- ・ えがく活動(描画的)では、日常生活の充実が反映するものとしての実践を考究する。

(6)「主体的な生活をめざして」

(昭和62年度～平成9年度、「研究紀要」第20号～第26号)

幼児がものごとに主体的に取り組み、自分の生活を形成していくためのステップを検討した。

- ・ 幼児の主体的な生活の姿を、毎日の保育実践記録から選出し、幼児の成長の普遍的な道筋を追究する。
- ・ 幼児の責任能力がいかなる環境・条件下で育成されるかを分析することで、保育者の援助の在り方を考案する。

幼児の実態と指導のねらいを、実際の保育と

幼稚園教員養成課程と附属幼稚園

平成9年3月退官
岸 井 勇 雄
(幼児教育学)

教育課程審議会の委員をお願いしていた岡山大学教育学部長(当時)秋山和夫氏から、富山大学で幼児教育の専任教授が欠員で卒論の指導もできず困っている、行ってあげてくれないかと言われ、当時四半世紀ぶりの幼稚園教育要領の改訂作業が大詰めを迎えていたところから告示が済むまではとお断わりしたのだが、文部省へ野村昇・教育学部長が事務長同道で見え、初中局長を通じての再度のお話に心を決めた。何よりの魅力は、教育と研究の場としての幼稚園教員養成課程と附属幼稚園の存在だった。富山が教育県であることも聞いていたが、校区を城下のように校下と呼び、委員会といえば教育委員会のことなどは、赴任して初めて知ったことだった。

学年定員30人の幼稚園教員養成課程を、志波和子・大石昂の両先生が守っておられた。それぞれ実践的学問的研究と同時に、学生の指導にも熱心に当たられ、私は良い仲間に入れていただいたことに感謝した。翌年、志波先生が退官され、後任の前田あけみ先生は数年後不幸にも難病に罹られて夭折、榎沢良彦先生をお迎えした。この昭和63年4月から平成8年3月までの9年間の在任中、ご一緒した4人の方はいずれも余人をもって代え難い力量と魅力をもっておられ、学生諸君とともによりよい教育環境の創造に努めることができた。

例えば、7月7日の七夕の日には、朝から学生も教官も123人が全員浴衣を着て授業に出席し、美術の竹井先生のご指導で作った大きな七夕飾りを学部の正面玄関に立てて記念写真を撮るなど、懐かしい思い出は限りが無い。卒業時の追い出しコンパや謝恩会で、実はこの大学、この学部、この課程に不本意で入った自分だったが、今はこれほど素晴らしいところで学べたことへの喜びと感謝と誇りに溢れて出て行くことができると涙ながらに述べて、感動の拍手を浴びる学生が毎年のようにいた。学生も教官も一人一人の良さを十分に出し合っ、専門性に目覚めた自立と連帯の場を作ることができたように思う。

平成2年4月1日、新教育課程施行の日、附属幼稚園長を拝命した。この年はフレーベルがキンダーガルテンを創設して150年目に当たり、しかもその時の彼と同じ58歳であったから、感慨も一入であった。それからの6年間、文部省の教育課程研究指定を受けた「幼児の主體的な生活 - 特に責任をもつ力の育ちについて」の研究をはじめとする一連の実践研究が成果を上げ、『研究紀要』や『子どもたちが主役の園生活』(学研)が広く読まれ、全国からの参観者が延べ2000人を超えた。これはひとえに杉谷利枝子副園長をはじめとする有能かつ誠実な教職員と、この私たちを信じてくれた幼児と家族の皆さんのおかげである。この間、全国国立大学附属学校連盟の幼稚園部会と校園長会という2度の全国大会を引き受けて開催することができた。大学、学部、附属学園の実力の賜物である。

そうこうする内に、少子化による教員需要減が教育学部を直撃した。教員にならないものに教育学部は要らないというのだが、その理屈からいえば、卒業生のほとんどが法律や人文科学の専門家になるわけではない法学部や人文学部を廃止して、サラリーマン学部にしなければならないということになる。狭い意味での教員養成コースは縮小されても、幼児教育のように普遍的な専攻・課程は確保されなければならない。私の在職中、30人という定員に対して志願倍率も就職率も決して低くはなかった。教員採用が冷え込んだ退職前年でも、ほぼ全員が就職または大学院に進学し、その内、幼児教育の専門を生かした者は20人であった。社会のニーズや実績に逆行するようなりストラは、大学として賢明ではない。

現代の青少年の問題の基盤に、幼児期の原体験がある。そのことの研究と教育に少なからぬ業績を積み重ねてきた本学教育学部幼稚園教員養成課程ならびに附属幼稚園の一員として、微力を尽くすことのできた幸せを思い、さらなる実質的な進展を願うばかりである。
(1998.9記)

指導計画に応用・検証することで、教育課程として確定していくプロセスを探究する。

- ・ 幼児が関わる「もの」の意味が生起し変容する要因、保育者の援助がその子の「もの」の意味に与えた影響、などの分析を通して、保育者の在り方を追究する。

(7)「環境とともに生きる子供

園庭の再発見」 (平成10年度～現在)

園庭という大きな自然環境のもつ意義を探究するため、2年計画で取り組んでいる。

3 現状と展望

附属幼稚園が平成9年度に創立110周年を迎えたことは前述の通りであり、現在は新たな一步を踏み出したところである。幼児の夢や好奇心を育む、豊かな自然環境の中で、園児132名と教職員12名は、活気あふれる毎日を過ごしている。

園庭には、春は桑やグミ、秋はざくろや柿など、子供たちの関心を集める果実が実り、それを食べながらの会話もはずみ、年齢差を越えた交友関係が見られる場でもある。そこでは、友達の良さを見付け、自分も成長していくのであり、私たちはそれを大切に見守っていきたいと考えている。

また、附属小学校の1年生と年長児との交流会、研究会では、教官が互いに協力者になって連携研修する、という体制も整えられている。附属養護学校の児童たちとは、園庭で一緒に遊んだり、学習発表会を通して交流を重ねている。学部の先生方には、研修会への参加や指導助言は言うまでもなく、壁画制作その他でも指導をいただいている。

ところで、「少子化」という時代の推移の中にあつて、附属幼稚園も従来のごとく安閑としてはいられない。学部の編成替えによって「幼稚園教員養成課程」は解消され、学生定員はこれまでの30名から大きく削減された。そのことは、必修の「教育実習」受講生の激減を伴い、附属幼稚園の存続の必要性にまで波及してくる。地域社会においては、「特色のある保育」の実践が積み重ねられることで、初めて社会的に容認されるものと思われる。従来からも「3歳児」定員が抑えられる問題はあったが、働く母親の増加に伴う「零歳児保育」などの新たな課題とは別に、「幼児教育」から「初等教育」への連続性を認識し、21世紀に向けた「幼稚園」の在り方が、今後は一層きびしく問われるものと考えなければならない。

幼児教育の展望は、上記のごとく必ずしも容易なものではないが、附属幼稚園としては、附属学園や学部との連携を密にしながら、県下の幼児教育の中核として邁進したいものである。

【学校概要 平成10年3月現在】

(1) 教育目標

- ・ 子供らしく、のびやかに、いきいきとした子
- ・ 自分で考え、行動し、責任をもとうとする子
- ・ まわりのすべてに心をかよわせて生活する子

(2) 教育方針

- ・ 生涯にわたる人間的発達の基礎を守り続け、生きる力と、人やものを愛する心の芽生えを培う。
- ・ 幼児期にふさわしい生活を通して、健康な心身と主体的な生活習慣や態度を養う。
- ・ 動植物などの自然と親しみ、環境や人とのかかわる体験によって、豊かな感性と創造的表現力を伸ばす。

年 齢	男 児	女 児	計
3歳児	10名	10名	20名
4歳児	28名	28名	56名
5歳児	28名	28名	56名
計	66名	66名	132名

(3) 学級編成

園長	副園長	教 諭	非常勤・講師	事務・用務員	計
1	1	5	3	2	12

(4) 教職員組織

第3節 附属中学校

1 略 史

(1) 黎明

本校は昭和22(1947)年4月、新しい教育制度の発足により、3学級編制の富山師範学校附属中学校として創設される。

現在の南部中学校の敷地にあった富山師範学校が戦災で焼け、終戦になり、五福の旧陸軍第35連隊の焼け残った建物に移転したのが昭和21(1946)年。翌年開校した附属中学校は、旧連隊の馬小屋跡を校舎としてその第一歩を踏み出したのである。

1年生2学級、2年生(附属小学校高等科より)1学級で、3年生のいない全校2箇学年の3学級。教官は当初、主事(附属小学校主事の兼任)と専任



馬小屋校舎（昭和22年4月～12月）

の教官3名の計4名。教科担任制をとる中学校で、専任教員のいない6教科については、師範学校本校の教官の出張授業となる。

この年入学の第1回生は、卒業までの3年間に、五福の地で、5つの校舎を経験する。

昭和22年4月～12月、旧連隊馬小屋跡校舎。

昭和23（1948）年1月～3月、旧連隊炊事場跡校舎。赤煉瓦の建物の内部を改装した校舎で、教室の白壁が美しく落ち着いた雰囲気であったという。この校舎で、記念すべき第1回目の入学試験が行われている。

昭和23年4月～昭和24年3月、旧連隊営倉校舎。将校集会所と営倉を改装した校舎であるが、現在の中学校の教育方針、精神基盤はこの時代に形成されたとされる。

昭和23年、大石修平作詞、石桁真礼生作曲により校歌制定。同年、生徒歌制定。PTA発足と機関紙『しろがね』の刊行。また、父兄の協力でグランドピアノが購入され、学舎に初めて、ピアノの音色が美しく流れたと、本校『35周年記念誌』に記されている。

昭和24年4月、富山大学富山師範学校附属中学校と改称。

昭和24年4月～昭和26（1951）年3月、旧連隊雪中演習場校舎。

戦後の慌ただしさの中とはいえ、落ち着く間もなく変わる校舎遍歴は、他にその例を見ないのである。

一方、このころ、附属学校の存廃が論議され、国の厳しい財政事情とあいまって、校舎建築の立ち遅れをきたしていたが、昭和24年には生徒会が結成され、25年には研究会が初めて開催されるなど、附属中学校の枠組みがつくられていく。



昭和23年制定 作詞 大石修平 作曲 石桁真礼生

（2）五艘へ

昭和26年4月、富山大学教育学部附属中学校と改称。新1年生に学級増が認められ、1年生3学級、2年生、3年生各2学級となる。

同4月、五艘校舎へ移転。雪中演習場校舎から、椅子、机等を歩いて運んだ生徒たちのことが今も語られる。校舎は、女子師範学校として建てられた木造平屋で、29（1954）年1月までの住まいとなる。

昭和29年1月、2階建ての木造校舎が新築（一部）され、2月、3年生が教室を移動。（第1期工事）

この後、五艘（旧）校舎の施設・設備は、順次整備されていく。

昭和29年12月、校舎第2期工事完成。特別教室を除き全校が移動。

昭和31（1956）年3月、第3期の工事が完成し、特別教室（社会科、理科、家庭科）ができる。

昭和32（1957）年2月、第4期の工事（体育館、音楽室、工作室）が完成。

昭和34（1959）年12月、第5期工事の完成。7年の歳月をかけて建築工事が完了し、北側の桜並木に沿って、待望の校舎が2階建てで完成する。

昭和35（1960）年12月、生徒ホール、更衣室、防火用貯水池が完成。この貯水池は、次の夏から、代用プールとしても使用。昭和40（1965）年7月、附属学校プール完成。

そして、昭和43（1968）年3月、鉄筋4階建てで新築された今の校舎が竣工。グラウンドも整備され、創立以来20年の歳月を経て、学校らしい学校が完成したのである。

この間にも、附属中学校を代表するものが新しく



旧校舎



現校舎

誕生する。

昭和28(1953)年3月、生徒会機関誌『やまなみ』創刊。既刊のPTA会誌とコンビで“しろがねのやまなみ”が完成と綴られている。

「昭和26年9月に本校校章改制」の記録が残るが、校章、徽章がそろうには数年を経る。

自分で考え 自分で計画し

勇気をもって実践しよう

己にうちかち 他を愛し

真善美を求めよう



校章



徽章

この本校の校訓は、昭和37(1962)年から38(1963)年にかけてつくられている。

当時について、本校『35周年記念誌』の座談会で

は次のように語られている。

附属の生徒の長所や短所についてアンケートをとりました。それから実態調査をしたんです。保護者にも先生にも協力いただいて、「生徒指導に関する若干の基礎調査」という一冊を出しております。

問題点を集約し、一つのことに置き換えるにはどういことがいいたろうかと、いろいろ考えた結果、最後に、この結論が出たのです。

この校訓が示すものは、現在も、そして将来も、受け継がれていく「附中の精神」である。

昭和37年12月、校旗樹立。

こうして本校の教育環境は整えられていく。



校旗

多少前後するが、昭和35(1960)年、大記録誕生。サッカーの年間連続無失点、全大会優勝(通算得点99、失点0)である。

昭和42(1967)年4月、学級増にともない第1学年が4学級となる。(44年12学級編制が完了)

五艘旧校舎を最後に巣立ったのが第20回卒業生。新校舎への移転について、「一つの時代が終わりをつげたようだ」と記されている。

(3) 新しい校舎で

昭和43(1968)年4月、第1、2学年各4学級、第3学年3学級の新校舎での附属中学校がスタート。

昭和44(1969)年12月、体育館完成。

昭和45(1970)年4月、特殊学級(1学級)新設。46(1971)年、47(1972)年に1学級ずつ学級増となる。

昭和51(1976)年4月、特殊学級が、附属養護学校として昇格独立。

同年11月、グラウンド改修工事完成。

昭和52（1977）年、創立30周年を記念し、校歌を合唱曲に編曲。『しろがね』34号は次のように伝えている。

校歌が、作曲者石桁真礼生先生の手により、混声4部合唱曲に編曲されました。

昭和23年制定以来、附中の未来を歌に託し、歌いつがれてきましたが、音楽教育の進展とともに高まりつつある生徒の歌唱力の実態から「ぜひ校歌を混声合唱曲に」という願いが石桁先生の快諾を得て達成されたのです。この校歌は、歌詞はもとより、曲の構成や変化に富んだ旋律の流れなどから見て、荘重にして風格があり、県下唯一の優れた作品と信じております。

昭和57（1982）年、創立35周年、35本の記念植樹。

昭和62（1987）年4月、附属学校共用棟が完成。武道場、多目的ホールが設けられる。

平成4（1992）年11月、全日本合唱コンクール全国大会、金賞、文部大臣奨励賞受賞。（コーラス部）

平成5（1993）年10月、同全国大会、金賞。（コーラス部）

平成6（1994）年3月、情報教育棟完成。LL教室、コンピュータ室、図書室、研修室が設けられ、これで、現校舎が整うこととなる。

同年、グラウンド改修工事完成。多目的コートおよびテニスコートが整備される。

平成9（1997）年11月、創立50周年記念式典（富山市芸術文化ホール）が挙行される。



創立50周年記念テレホンカード

こうして、50年のあゆみのなかで、年々教育環境も充実発展し今日に至っている。

平成10（1998）年3月、第50回の卒業生が学窓を巣立ち、その数約七千数百人を数える。国の内外を問わず、第一線で活躍する人は多い。

2 教育研究活動の展開

（1）発足、人間形成、そして課題学習

戦塵のほとぼりのさめやらぬ昭和22（1947）年、教育基本法ならびに学校教育法が公布され、次いで中学校の学習指導要領（試案）が制定される。その後検討が加えられ、昭和26（1951）年改訂。いわゆる新カリキュラム時代であり、生活単元学習や問題解決学習についての論議の明け暮れで、この間は、いわば中学校教育の産みの苦しみと混乱をともなった時期である。

本校の第1回の研究協議会は、このような時代に開催される。

P T Aの機関紙『たがえし』93号（昭和42年）には当時のことが次のように記されている。（一部略）

そして喧々諤々、狭い主事室に集まったの教官会議は、時を忘れ、連日のように続けられた。論じ合い、研究授業をお互いにしながら酷評会をやった。

研究発表会を一度もとうではないか。そんな気風がみなぎっていた。そしてみんな若かった。

昭和25年、夏休みを返上し、「中学校の教科課程」200余ページのもの、「学習指導基準表」、「各教科カリキュラム」を作りあげた。

そして第1回研究発表会をもったのが、昭和25年10月であった。（中略）

当校の研究が、研究会のための研究ではなく、「こどものための教育」が、一丸となって発足されたことは、平凡にして非凡ともいえよう。

昭和25（1950）年10月、第1回研究協議会。

昭和27（1952）年5月、第2回研究協議会

（第1回、第2回とも附属小学校と合同で開催）

この間を含め、昭和20年代は、おもに各教科ごと、学習指導を中心に実践活動に取り組む。

その後、昭和30年代は、時代の変遷や要求を反映しつつ、生徒の実態に立脚して、人間形成を目指す教育のあり方について研究と実践を積み重ねる。

昭和32（1957）年10月、北陸地区附属学校研究集

会（富山会場）が3日間開催されるが、この年あたりから、人間形成を目指して広範囲な研究に着手していく。

幼・小・中と一貫した教育計画のもとに、緊密な連携を保ちながら、特に各教科の指導を軸として、「生徒が主体的に学習する態度の育成」を目指して研究実践を重ねる。

昭和33（1958）年10月、第3回研究協議会。（この回より39（1964）年の第9回までは、幼・小・中合同の開催）

昭和39年、40（1965）年には、「学習指導の構造化」を研究主題として、学習における生徒の認識の深まりと発展をめざした効果的な指導のあり方について研究が行われている。

「構造化」ということについて、先述の『たがえし』93号には、次のように記述されている。

生徒たちの人間的な高まりを目指すには、学校教育の全体的な構造化が図られなければならないことはいうまでもない。すなわち、学校教育目標をめざして教育課程の各領域が、学校教育のなかでどのように位置し、どのような役割を果たすべきか、相互の関連はどうか、望ましい学校教育のあり方、指導上の問題点をみつめ、学校や学級などの集団の中で生きる生徒たちに、いかにすれば全体的な高まりを目指すことができるかが究明されなければならない。この点についても、教科の指導と並行して研究実践が積み重ねられてきたことを付言しておかなければならない。 と。

そしてこの間、新たに認識されたのは、望ましい学校教育のあり方や学習指導法について再検討し、生徒の主体性の高まりを目指す学習指導法を模索しなければならないということである。すなわち、

学習を通して生徒に「次のものを生み出す力、転移可能な力」をつけるために、生徒自身が発する疑問や問題を生徒自身で解明していく学習方法が考えられないか、教科の目標と生徒の興味・関心をマッチさせる学習方法はないか、校訓に見られる精神に合致した新しい人間教育が必要ではないか、という認識である。

その結果、これまでの実践の経緯を踏まえ、上記の認識に立った本校独自の「課題学習」が提唱され、昭和41（1966）年より研究主題を「主体性の高まり

を目指す課題学習」と改め、今日に至る。

（2）「学習の仕方の学習」を視点に

昭和41年から昭和49（1974）年までの9か年の間で、今日の本校の課題学習の基本的な考え方が確立される。すなわち、課題学習の定義、課題の定義、および「課題の設定・把握」「課題の追究・解決」「課題の定着・発展」の3段階からなる学習過程である。

昭和45（1970）年、『課題学習による主体性の育成』を明治図書から出版。

昭和50年代に入ると、教科によって研究の取り組みの視点に違いが出てきて、学校として研究の焦点を絞る必要が出てくる。課題学習を取り入れたのは、そもそも生徒の主体的な学習の高まりを目指してのことであり、研究の焦点化に際し、より生徒の立場に立った視点をもつことが提唱されたのである。

その結果、「学習の仕方の学習（学び方を学ぶ学習）」を視点に課題学習を再検討することになる。つまり、課題学習を通して、生徒自身がどのように学習の仕方を身に付けていったか、どのようにすれば、単に教材内容の理解にとどまらずに、自力でその内容を学習していけるだけの学習の仕方を身に付けさせることができるか、課題学習における生徒の姿を見つめながら再検討することになったのである。

そして、昭和50年代の終わりには、これまでの研究に加え、生徒の実態に即した指導はどうあればよいか、生徒の変容をどのようにとらえ、それを生かした学習はどうあればよいか、学習意欲に欠ける生徒に関心・意欲をどのようにもたせるか、生徒一人一人を生かす手立てと教師の役割はどうあればよいかについて、「学習の仕方の学習」の継続研究が行われている。

この間、課題学習の展開1『学び方を学ぶ理科の課題学習』（54年）、2『学び方を学ぶ国語科の課題学習』（58年）を明治図書から出版した。

昭和60年代に入り、「自己教育力の育成」が叫ばれるようになったこと、主体的な学習者を育てるには生徒自身に学ぶ意欲をもたせることが大事であることを再認識したことから、「学ぶ意志の形成」の観点でさらに研究が進められる。

学ぶ意志とは、生徒の「常に問い続ける姿」「自ら切り開いていく姿」のことであり、その目指すところは「自分の生き方を求め、自分を高めていく態度」を育てることである。各教科ごと、教科がねらう本質を含めた目指す生徒像を打ち立て、生徒一人一人に目を向けた研究が進められる。

平成の時代になり、それまでの課題学習の見直しの中で、生徒の実態に即した指導はどうあればよいか、生徒一人一人を生かす手立てと教師の役割はどうあればよいかなどが問題点として出てくる。

そこで、生徒一人一人の個人差に目を向け、「生徒一人一人が意欲的に学習に参加し、学び方を身に付ける指導法」について研究を進める。

平成4年、以上の成果を『学び方を学ぶ課題学習』（明治図書）として発刊するに至る。

(3)「感性」を視点に

昭和41年より継続してきた「主体性の高まりを目指す課題学習」の研究では、常に生徒自身の立場に立った指導法が模索されてきた。

「学習の仕方の学習（学び方を学ぶ学習）」や「学ぶ意志の形成」の視点もまた、生徒一人一人に目を向けようということから生まれたものである。

昭和62（1987）年、教育課程審議会の答申が出され、新教育課程の改善のねらいが次のように示される。

豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図る。自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図る。国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図る。国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を図る。

そして、平成元（1989）年告示（5年度より実施）の新学習指導要領の趣旨は、「心豊かな人間の育成」、「個性を生かす教育の充実」である。

そこで、こうした時代の動きに対応するために、これまで以上に生徒一人一人の立場に立った視点で主体性の高まりを目指して研究を深めていくことが大切であると認識を新たにした。

具体的には、課題学習では、生徒自身にとって追究するに値する課題を見つけ出す力、課題解決に至るまで追究し続ける力、また、新たな視点で課題を見つけて追究していく力が求められる。つまり、

一人一人の問う力や問い続ける力が大切であり、そのもととなるのは、情報や刺激を感受し、受容し、選択していく力である。これをとらえ、生かし、高めていくという視点をもつ。課題を追究する中では、見つけ出したことや分かったこと、まだ解決できていないことを出し合い、自らの課題解決に生かしていく姿勢が求められる。したがって、表現する力や学ぶ力をつけさせるという視点をもつ。個性を生かすには、一人一人の生徒の内面をとらえ、それを生かし、育み、豊かにしていかなければならない。という3点が認識されたのである。

そこで、個性を形成するもととなるものとして、「感性」に視点をおいて研究を進めることになる。「主体性の高まりを目指す課題学習」を主題とし、副題に、平成6（1994）、7（1995）年は「感性を生かした学習」を、平成8（1996）、9（1997）年は「豊かな感性を育む学習」を、そして平成10（1998）、11（1999）年は「感性を豊かにする学習」を掲げて、研究を進めている。

研究叢書にみる研究活動

これまでの叢書の中から、研究協議会で出した研究紀要以外の研究発表等を取り上げるとおよそ次のようになる。

- ・ 1 昭25 中学校の教科課程
- ・ 昭25 学習指導基準表
- ・ 6 昭34 生活指導に関する若干の基礎調査
- ・ 8 昭37 学級活動指導計画と実践例
- ・ 16 昭46 各種研究の発表
 - ・ 課題図書における集団読書の指導法
 - ・ 公民的分野における「家族生活」の指導について
 - ・ 理科改訂中学校学習指導要領の研究
 - ・ 学校環境衛生の一面
 - ・ 「コンデンサ」の学習指導について
 - ・ 住居指導の一考察
 - ・ 英語学習における「導入文の工夫」
 - ・ 本校生徒の生活実態調査（第一報）
- ・ 18 昭48 各種研究の発表
 - ・ 探究学習における指導上の問題点
 - ・ 本校における地歴並行学習の実践
 - ・ 走り高跳びと体格・体型との関係に

- ついで
 - ・立方体の製図的表現
 - ・特殊学級生徒の職業適性について
- ・ 23 昭52 各種研究の発表
 - ・ 円に関する定理説明器による指導、
 - ・ タイルによる正・負の数の指導
 - ・ 本校視聴覚部の実態と動向
 - ・ 本校修学旅行の実践
- ・ 30 昭58 主体性の高まりを目指す課題学習
「学習のしかたの学習」の研究のあゆみ
- ・ 31 昭58 各種研究の発表
 - ・ わかりやすい理科学習の学び方と教師の工夫
 - ・ 生徒が主体的に行う健康管理の確立をめざして
 - ・ 話し合い学習の進め方と教師の役割
- ・ 43 平 6 各種研究の発表
 - ・ 身近な自然から学ぶ学び方
 - ・ 生徒の意識にみる音楽科の学力観
 - ・ 英語の読み物教材での試み
 - ・ 入門期の古典指導
- ・ 46 平 8 学び方を学ぶ選択教科 など

3 現状と展望

この先、附属にとって大切なことは何なのか。
本校35周年記念誌の座談会で、次のような意見が述べられている。

理想を求めて始めた課題学習です。これは、生徒の成長を願う望ましい一つの教育方法論であり、生徒がどう伸びているかという姿が評価となります。教育のあるべき方向の研究なのですから、より発展への方向をたどるべきでしょう。

これは、県下全部、日本全体だと思いますけど、幼小中一貫の教育ということでしょうね。その中で、中学校がどうあるべきかを研究することです。附中は富山県に一つだという自負心を起こすこと。そのために、浩然の気を養って、いつも一歩前進するような生徒を育て上げてほしいですね。

附中の伝統とかよさってなんでしょう。「入学させてみてわかる魅力」、そうなんです。いろいろあるのですが、その一つに3年間学んだ生徒たちの友情があります。それが大人になっても続いている。その友情の育つ土壌があるんでしょう。次に、信頼関係です。率直な話し合いのできる人間関係、生徒同士、先生同士、先生と生徒、保護者と先生の人間関係も信頼関係で結ばれている。そのよさを守っていくべきだと思います。守るだけでなく、築いていくのが伝統だと思います。

平成9（1997）年、創立50周年にあたり、中村義朗校長は、記念誌『移りつつ変わらざるまことあれ』の巻頭のあいさつの中で、

教育研究、教育実践、教育実習において、わが校は、移りつつ変わらざるものの伝統を継承しながら、時代の流れに沿った新しい気風を取り入れ、社会の価値観に対応できる生徒の育成に努めている。

校訓に示されるように、生徒一人一人が個性を

終戦 輝く白銀の山なみのもと
新たな歴史が刻まれ始めた
兵舎の小さな馬小屋で

疲れ果てた人々は 黒々とした空を見上げた
きつと来るだろう明日に思いをはせて

あれから五十年
様々なドラマが新しい世代とともに
輝き出した

春は、新芽を桜色に染め
夏は、若葉を碧に染め
秋は、木々を虹に染め
冬は、山を白銀に染めた

巡りゆく季節の中
美しいピアノの調べは
新しい息吹を迎え
はばたく翼を
送っていった

時代は過去
現在
未来

いつまでも歴史となって流れてゆく
けれども変わらざる真実は美しく
誇り高く残っている

海も 山も 河も
この学校と同じように

そして今
五十年という節目から
新しい希望が
附中の歴史に刻まれる

（生徒会五十周年記念誌編集委員会）

発揮し、学習、行事、生徒会活動、部活動等に生き生きと取り組む姿はわが校の最も誇りとするところである。

時あたかも、21世紀を展望した教育改革の期にあたり、「自ら学び、考え、主体的に判断する能力」の育成が求められている。これらの視点は、わが校が追究している教育のあり方に相通じるものがあり、その先見性に対して意を強くするものである。と記している。

今、附属中学校は、中国遼寧省の中学校との友好校提携の話が具体化しつつあり、また一方、新学習指導要領の平成14年度完全実施を目前に控え、新たな一歩を踏み出そうとしている。

今後、輝かしい伝統と誇りある歴史に支えられながら、新しい世紀に向けた学校へ進展するよう、決意を新たにするものである。

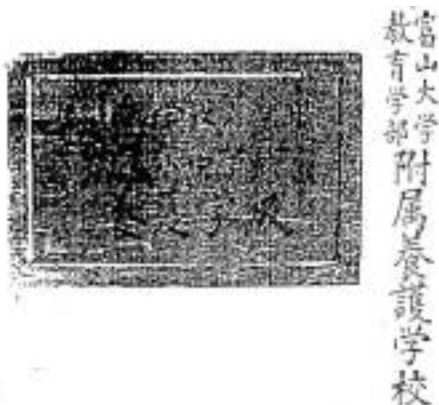
第4節 附属養護学校

1 略 史

(1) 特殊学級から養護学校へ

昭和42(1967)年4月、教育学部に養護学校教員養成課程が設置されたことに伴い、その実習の場として、昭和43(1968)年7月、附属小学校の図書室に児童二人と教師一人の特殊学級が新設された。これが、附属養護学校の前身である。昭和45(1970)年には附属中学校にも1学級が新設されるなど、年を追って学級数が増設されていった。

昭和45年12月には、特殊学級校舎が附属幼稚園跡



養護学校独立時の校舎

地に竣工されて移転した。冬季の引っ越しであったが、子供も教師も寒さを吹き飛ばして移転作業に取り組んだ。小・中での仮住まいに終止符を打ち、新しい校舎での学習に胸弾ませでのスタートだった。

昭和51(1976)年4月、「健全な心身と社会生活に適應できる能力を養い、力強く生き抜いていく人間を育成する」という教育目標を掲げ、富山大学教育学部附属養護学校として独立した。初代校長に頭川徹治教授が就任。PTA広報紙『わかば』も創刊され、その活動も活発になっていった。

「雪のように純白で健やかに育て欲しい」という願いを込めて、六角形の雪の結晶を表した中央に「附養」の文字を組み込んだデザインの校章が制定された。



附属小・中学校の特殊学級で育てていただいた8年間を終えたこの時点で、児童生徒数は45名、教員数は13名であった。

(2) 高等部の新設と校舎の増改築

昭和52(1977)年4月、高等部が新設された。その後は学年進行によって学級も増設され、昭和54(1979)年4月には、小学部、中学部、高等部の完備した養護学校となった。「小鳥が とんでる 青い空 / 大きい 空に胸はって」(作詞・高森邦明・元教授)と始まる校歌の指導には、作曲者の小沢慎一郎教授自身がピアノを弾いて、児童生徒の実態を見ながら取り組まれた。それまでは校歌がなく、NHKの「みんなの歌」などから選んで歌っていた児童生徒たちは、分かりやすい歌詞の校歌を愛唱歌とすることができるようになった。

題字 = 故・鶴木大寿(元教授)

さらに、これまでの校舎は建面積712.596平方メートルの基準面積に達していなかったことから、高等部の新設に伴って校舎の増築を計画していった。城山近くの国有地に移転するのであれば早期に建設の見通しもあったが、交通の便が悪く、交流学习ができない、買い物など具体的な生活場面での学習がしにくい、校地内を用水が走っていて危険である、等々の理由から、現在地での増築を願うこととした。この計画には、附属学園の共有運動場の一部を養護学校に含めたり、プールの移転や近隣地への校地拡張の見通しを持たねばならず、附属幼・小・中学校PTAや近隣の土地所有者の理解を求めるのに難渋した。

ようやく昭和53(1978)年11月、現地での増改築着工の運びとなったが、工事中の学習場所として、再び間借りと分散授業とを余儀なくされた。附属幼稚園の2階、附属小・中学校のそれぞれの図書室、教育学部の1教室等を借用して授業を行い、2学期の終業式は分散した各教室を学校長が巡回して行った。

この年の卒業式は、富山大学学生会館で実施された。建設工事は暖冬に恵まれて順調に進み、昭和54年7月、竣工式を行ったが、この間の関係者の苦労は並々ならぬものがあった。しかし、8カ月ぶりに明るい児童生徒の声が戻り、ここに名実ともに富山大学教育学部附属養護学校が出来上がった。

(3) 教育内容の充実

昭和54年の学習指導要領の改訂に伴って、養護学校教育が義務制となり、教科内容も発達年齢1歳～1歳半まで引き下げられた。新校舎の落ち着いた環境が出来上がったことから、教育内容の充実を図り、「教育内容の精選と教育課程の編成」を研究テーマとして取り組んだ。

また、高等部を卒業する生徒たちの社会参加を支



倉庫を工場に見たての作業学習



『わかば』創刊号

援すべく、作業学習に重点を置くため、ミニグラウンドの一部に作業実習棟が建設された。これによって、会社形式や流れ作業での現場実習の形態が取れることから、作業への意欲増進、作業能力の適性化が図られ、多くの卒業生の就労や施設入所に役立っている。

昭和56(1981)年からは、「完全参加と平等」をテーマとした国際障害者年が始まった。そこで、長期的視野に立った在校生の教育や、卒業生の社会参加・自立に関わる、様々な情報を交換し合うため、附属養護学校に籍を置いた教員をもって組織する「忘筌会」が、第2代校長・藤井義孝教授の発案で発足した。

ところで、昭和55(1980)年に第1回的高等部卒業生を送り出して以来、昭和60年には過年度の卒業生数も70名近くに増えてきた。多くは、一般企業、作業所、施設などへ巣立っているが、進路先での諸問題(職場への適応や休日の余暇活用がうまくできない、交友関係が限定されて孤立しがちである等々)に因應するため、予後指導の必要性が高まっていた。そこで、卒業生の保護者有志が集まって「富山大学教育学部附属養護学校同窓生親の会」が結成され、卒業後の生活支援にも積極的に取り組んでいった。

昭和58(1983)年4月には、富山県の知的障害児

表 1

	実施期日	研究主題	講演会	研究紀要等
第 1 回	昭和46年11月 5 日	こどもがよるこんで学習するための指導 言語学習を効率的に進めていくにはどのよ うに指導すればよいか		研究紀要第 1 集
第 2 回	昭和48年 6 月 8 日	よるこんで学習することをも育てる指導		研究紀要第 2 集
第 3 回	昭和50年 5 月16日	特殊学級における養護・訓練の指導		研究紀要第 3 集
第 4 回	昭和52年11月 8 日	養護・訓練の指導 ひとりひとりの障害に応じる養護・訓練の指 導をどのようにすればよいか		研究紀要第 4 集
		養護・訓練の指導 ひとりひとりの障害に応じる養護・訓練の指 導をどのようにすればよいか		研究紀要第 5 集 (昭和55年 3 月)
第 5 回	昭和56年10月28日	力強く生き抜く子どもを育てる教育課程の編成	「特殊学級及び養護学校の教育課 程の編成について」 国立特殊教育総合研究所 精神薄弱教育研究部長 宮崎 直男	研究紀要第 6 集
第 6 回	昭和58年 6 月24日	力強く生き抜く子どもを育てる教育課程の編成	「特殊学級及び養護学校の教育課 程の編成」 文部省特殊教育課 教科調査官 大南 英明	研究紀要第 7 集
第 7 回	昭和60年11月22日	ひとりひとりの生活を豊かにする学習の創造 授業の工夫をとおして	「子どもがいきいきとする授業の 進め方」 横浜市立大学 教授 伊藤 隆二	研究紀要第 8 集
第 8 回	昭和61年11月21日	ひとりひとりの生活を豊かにする学習の創造 授業の工夫をとおして	「創造性を高める授業の工夫」 横浜国立大学 助教授 小林 芳文	研究紀要第 9 集
第 9 回	昭和63年 2 月19日	個人差に応じた体力づくりの指導	「精神遅滞児の体力について」 富山大学 助教授 横山 泰行	研究紀要第10集
第10回	平成元年 2 月17日	個人差に応じた体力づくりの指導	「何のための体力か」 富山大学 助教授 横山 泰行	研究紀要第11集 年間指導計画 教材・教具集 測定・評価集
第11回	平成 2 年 2 月16日	個人差に応じたことばの指導	「子どもことばの指導」 京都女子大学 教授 岡本 夏木	研究紀要第12集
第12回	平成 3 年 2 月15日	個人差に応じたことばの指導	「ことばのはたらきと心の成長」 京都女子大学 教授 岡本 夏木	研究紀要第13集 ことばのチェックリスト 年間指導計画
第13回	平成 4 年 2 月21日	表現力が高まる指導はどうすればよいか 音楽科・美術科(図画工作科)の視点から	「子どもの表現をどう読むか」 愛育養護学校 校長 津守 真	研究紀要第14集
第14回	平成 5 年 2 月19日	表現力が高まる指導はどうすればよいか 音楽科・美術科(図画工作科)の視点から	「表現力が高まる音楽の授業づくり について」 国立音楽大学 教授 繁下 和雄	研究紀要第15集
第15回	平成 6 年 2 月18日	表現力が高まる指導はどうすればよいか 音楽科・美術科(図画工作科)の視点から	「表現力が高まる美術の授業づくり について」 十文字学園女子短期大学 教授 林 健造	研究紀要第16集
第16回	平成 7 年 2 月17日	生活力を高める「かず」の指導	「算数・数学の基礎概念の指導につ いて」 帝京学園短期大学 教授 藤原 鴻一郎	研究紀要第17集
第17回	平成 8 年 2 月20日	生活力を高める「かず」の指導	「生活に生かせる『数と計算』の 指導」 帝京学園短期大学 教授 藤原 鴻一郎	研究紀要第18集 年間指導計画 題材集
第18回	平成10年 2 月18日	「一人一人の教育的ニーズに応じた支援はど うあるべきか」 家庭でも使える支援ツールづくり	上越教育大学 助教授 藤原 義博	研究紀要第19集

教育の一層の向上を図ることを目的として、本校が中心となって「富山県精神薄弱教育養護学校連絡協議会」を設立した。以後、県立の知的障害養護学校との連携を進め、各種の教育上の諸問題について、必要に応じて大学・学部の施設の活用や学部教官の助言を得るなどの連絡協議を重ねている。

昭和61（1986）年には養護学校創立10周年の節目を迎え、10周年記念誌『あゆみ』の巻頭言に、第3代校長・中川孝教授は次のように記している。

障害児教育は教育の原点であるとされるように、ハンディキャップを背負いながら精一杯生き続ける子供たちの姿は、昨今のいじめ、自殺をはじめ、極度の不適応現象に直面する教師や親たちに限りなく大きな教訓を示してくれます。素朴で純粋な生き生きした瞳や表情は、教師の教育観、指導観の指標であり、人間愛、人間性尊重、信頼、受容などと表現されるわれわれ自身のあり方を示す証であると認識する時、日頃からの継続的な研鑽と修業が要求されていると考えます。

かくして、このころから他校に見られない様々な充実した行事が展開され、多様な活動に児童生徒、教員、保護者は積極的に参加して今日に至っている。例えば学校の年間行事として、校外宿泊学習、養護学校3校交歓会、立山登山、納涼大会、親子運動会、水泳教室などが計画され、充実した学園生活が展開されている。

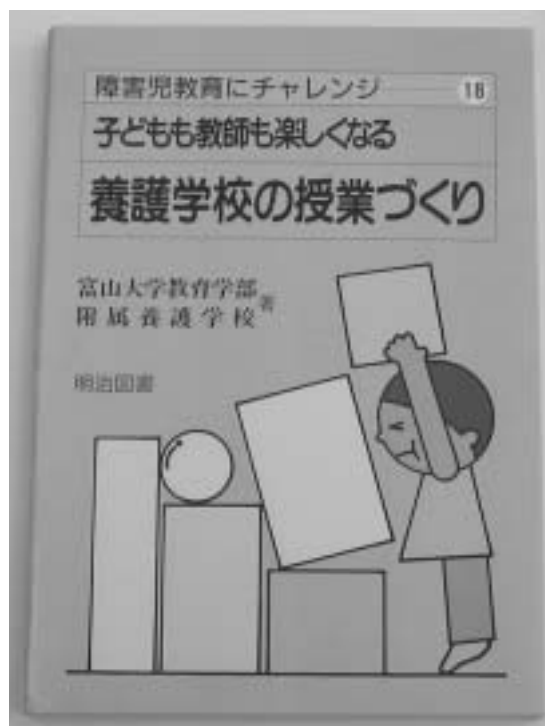
2 研究教育活動の展開

(1) 学校課題

本校は、昭和51（1976）年の開設以来、児童生徒の実態に則した教育を求めて研究を続けてきた。

開校当初は、特殊学級時代からの継続研究として、昭和54年度までは「養護・訓練の指導」を、また昭和55年度から58年度までは「教育課程の編成」を、本校の学校課題に設定した。

また、前述の教育課程の改訂に基づき、昭和54年度より「一人一人の生活を豊かにする学習の創造」を研究テーマとして、学習指導法のあり方に視点を置いた実践が深められた。具体的には、各教科、領域、領域教科を合わせた総合的な指導の授業研究を年次計画を追って取り組んだ。この間、障害児教育



系や関連教科の学部教官などを招聘して、現職教育の機会を設けるなど、研究内容の深まりを企図した。

さらに、昭和59年度から平成7年度までは「学習指導法の解明」をテーマに取り上げ、教科・領域にかかわる授業研究を中心とした実践研究会を毎年開催してきた。

具体的には、平成元（1989）年の学習指導要領の改訂により、障害に応じた教育の一層の充実と、高等部における職業教育の充実が求められた。本校では「父親の会」が発足し、会員（父親）同士のコミュニケーションを図ると共に、現場実習の受け入れ先や進路開拓などの情報の収集と交換、各種の研修活動の実施などにより、母親だけではなく、両親揃ってのPTA活動の活発化が見られた。

さらに、平成2年度からは、第4代校長・新井文



創立20周年記念誌『あゆみ』

男教授の下に「表現力が高まる指導はどうあるべきか」を学校課題として、音楽・美術の視点からの授業研究を行った。

本校では、上記のごとくテーマに応じた学部教官（教育学、国語科、体育科、音楽科、美術等）の指導を日常的に受けて、研究に取り組んでいる。

研究の成果は、毎年2月（定例）に開催する「実践研究会」での『紀要』に発表してきたが、平成8年には、過去の教育実践をまとめた『子供も教師も楽しくなる養護学校の授業づくり』（明治図書）を出版し、関係者の好評を得ている。

さらに、平成7年度より2年がかりで、学部の美術科教官および学生の協力を得て、「四季」と題する大理石の壁画制作に取り組んだ。この壁画は、児童生徒の伸び伸びとした夢のある絵をもとにしたもので、縦420センチ、横345センチの大作である。正面玄関の壁面に組み込まれ、見るものに強い印象を与え、現在では附属養護学校のシンボルとなっている。

(2) 北陸3大学プロジェクト

北陸地区の福井・金沢・富山の3大学の附属養護学校では、昭和52（1977）年から現在まで20年以上、3年ごとに共通のテーマでプロジェクトを組んで研究を進めてきた。このように規模を同じくする附属養護学校の共同研究は全国的にも珍しく、多方面から注目を浴びている。

取り組んだ研究テーマは次の通りである。

第1期	昭和52～54年度	研究紀要第1集 教材・教具の研究開発を通しての「養護・訓練」の指導方法の確立 -サーキット方式による運動機能の向上-
第2期	昭和55～57年度	研究紀要第2集 自閉症児の興味や行動への意欲づけをはかる教材・教具の開発
第3期	昭和58～60年度	研究紀要第3集 コミュニケーションに問題がある子の指導
第4期	昭和61～63年度	研究紀要第4集 からだづくりの効果的な教材・教具の開発
第5期	平成元～3年度	研究紀要第5集 手指技能を高めるための効果的な教材・教具の開発
第6期	平成4～6年度	研究紀要第6集 表現力を高める授業の探求
第7期	平成7～9年度	研究紀要第7集 障害児における「生涯教育の基礎としての学校教育の在り方」

(3) 施設・設備の拡充

平成2（1990）年より時代の流れに応じて、養護学校にもコンピュータが導入されるようになり、教科指

導で児童生徒の実態に即した各種のソフトウェアの活用と開発が、学部教官との連携で進められた。また平成9年にはホームページを開設し、本校の教育活動や障害児教育に関する情報を随時発信している。

他方、こうした新しい機器が配備される反面で、校舎内外施設の老朽化も次第に顕著なものになっていった。併せて、多様な障害を持つ児童生徒の増加により、窓ガラスの安全ガラス化、窓枠の整備、トイレの一部洋式化の工事など、施設整備の改善も行われていった。

(4) 創立20周年記念式典の挙行

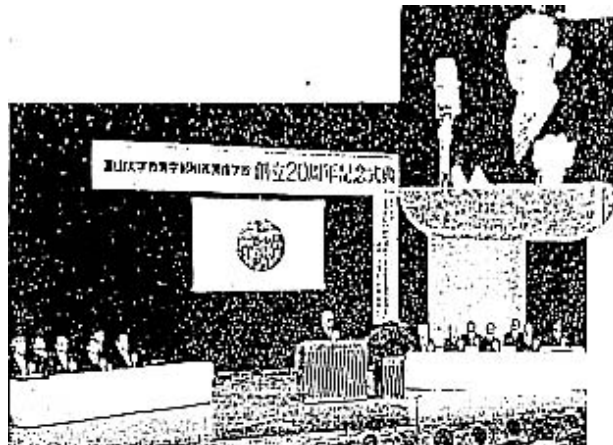
平成8年11月1日（金）、創立20周年記念式典を富山大学黒田講堂で実施することができた。

『富山大学学報』第383号（平成8年12月）は、当日の様子を次のように伝えている。

記念式典には、小黒学長はじめ来賓、PTAおよび本学関係者並びに同窓生の保護者、在校生、教職員など260名が出席し、宮崎州弘校長が「これからも、子供達に社会の中で生きる力を進展できるよう努めたい。」と式辞を述べ、小黒学長及び田中教育学部長の挨拶の後、来賓の楠 顕秀 富山県教育委員会委員長から祝辞がありました。続いて、児童生徒を代表して高等部2年坂井謙司君が「みんなで力を合わせて勉強に励み、学校の伝統を守っていきたい。」と喜びの言葉を述べました。

式典に続いて、上智大学手塚直樹講師による記念講演が「新しい時代の中で豊かな生活の実現を」と題して行われました。

その後、祝賀会が催され、和やかな雰囲気の中



記念式典で挨拶をする小黒千足学長
右上は式辞を述べる宮崎州弘附属養護学校長
（『富山大学学報』第387号、平成8年12月）



学習発表会で舞台発表する高等部の生徒たち

“創立20周年”を盛大に祝い、今後一層の発展を誓い合いました。

翌日、「学習発表会」や壁画の序幕式が行われたことについての記述も見られる。記念誌『あゆみ』の巻頭言に、第5代校長・宮崎州弘教授は次のように記している。

第15期中央教育審議会答申でも述べていますように、子供たちに可能な限り社会的自立と参加が出来るような“生きる力”を保障していかなければなりません。そのためには、なお一層指導内容・方法・指導体制の改善・充実に務め、教育条件の整備を進める所存です。また、様々なレベルでの交流教育、地域社会との連携なども推進していかなければならないと考えております。

これを受けて本校では、以後、隣接する附属幼稚園、附属小学校、附属中学校との日常的な交流を学習活動に組み入れたり、学生ボランティアの計画的導入や、学部教官を現職教育の講師に迎えるなど、自己研修に積極的に取り組み、児童生徒一人一人が社会参加の出来る“生きる力”を育むため、先進的な教育実践を目指して邁進し、今日に至っている。

3 現状と課題

附属養護学校は、創立20年の節目を刻み終え、新たなあゆみを始めたところである。児童生徒数60名、教官数約30名と小規模な学校であるため、弾力的な活動を積極的に取り入れて教育効果を上げるべく努力している。

スクールバスを活用し、公共施設を利用して行う校外学習や、選択肢を多く設けた具体的な場面での総合的な学習活動等は、本校の独自な実践としてひそかに自負する内容のものである。

また、入門期から卒業後の指導にまで至る、きめ細かな教育相談や進路相談は、学部教官や関係教職員の組織的な活動として、保護者の厚い信頼を得てきている。その結果、「同窓生親の会」、「父親の会」、「PTAわかば会」などの支援を受けつつ、卒業生全員が能力や適性に応じて社会参加を実現している。社会変動の激しさは今後も深まるものと予想されるため、同窓生に対する組織的な援助の必要性は、一層重要視されるだろう。

また、本校では現職教育の一環として、国立特殊教育総合教育研究所等への内地留学研修を毎年行



《ボランティア活動》老人保健施設レインボーへの慰問
「黒田節、花笠音頭を踊ったら、歌を口ずさんでもらえたよ」



附属学校園合同運動会

い、教職員の質の向上を図ってきた。今後は、学部教育学研究科における受け入れ数の定例化の実現や、学部との共同研究等をさらに積極的に推進すると共に、本校を中心とする公開講座等の開設を図るなどして、特殊教育のセンター的役割を果たしていきたいと考えている。

施設設備の面では、多様な児童生徒の日常生活の指導や保護者教育、教育相談、同窓生の予後指導等のための、「日常生活訓練施設」の新設を願っている。社会の変動に対応する学校教育の在り方が重視されている現在、養護学校においても生涯教育やQOL（生活の質）の向上の必要性が増しており、早期の着工が望まれる。

さらに、隣接する各附属学校園との交流学习や、学部の学生との多様な触れ合いを実現する授業観察や各種の実習は、それぞれに貴重なものとなっている。こうした方向は、特殊教育の立場からだけでなく、普通教育の面からも一層深められねばならないであろう。

平成10年度からは、「介護等体験特例法」が実施されることになったが、本校では、従来から学生の積極的なボランティア活動を授業に組み入れ、効率的な学習を展開してきた。今後は、長期休業中に行っている「学校開放事業・おもしろ学校」や学校行事等にも、計画的にボランティアの参加を募り、多様で特色のある総合的な学習活動が展開できる学校にしていきたいと考えている。

【学校概要 平成9年3月現在】

- (1) 校訓
- ・なかよく力を合わせよう
 - ・すすんでねっしんにやろう
 - ・あかるいえがおでがんばろう

(2) 教育方針

- ・児童生徒の障害の状態及び能力、特性の的確な把握に務め、一人一人に即応した指導を行う。
- ・一人一人の児童生徒の経験及び興味や関心を重んじ、できるだけ自主的、自発的な学習をするように指導する。
- ・教師と児童生徒及び児童生徒相互の好ましい人間関係を育て、日常生活の指導の充実を図る。
- ・学校生活全体における教育環境を整え、明るく健全な児童生徒の育成を図る。

(3) 教育課程

- 小学部教育課程
 - 中学部教育課程
 - 高等部教育課程
- （構造図参照）

児童生徒の実態に応じて、個別指導を随時取り入れたり、教科別指導や領域・教科を組み合わせるなどして、指導に当たっている。

(4) 学級編成（養護学校全体で9学級）

（各学部3学級編成、小学部は複式学級）

毎年、12月初めに発育検査を行い、次年度の入学生を選考している。これに先立ち、各学部では教育相談、学校説明会、体験学習等を行っている。

小学部			中学部			高等部			定員
1組	2組	3組	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
6人	6人	6人	6人	6人	6人	8人	8人	8人	
18人			18人			24人			60人

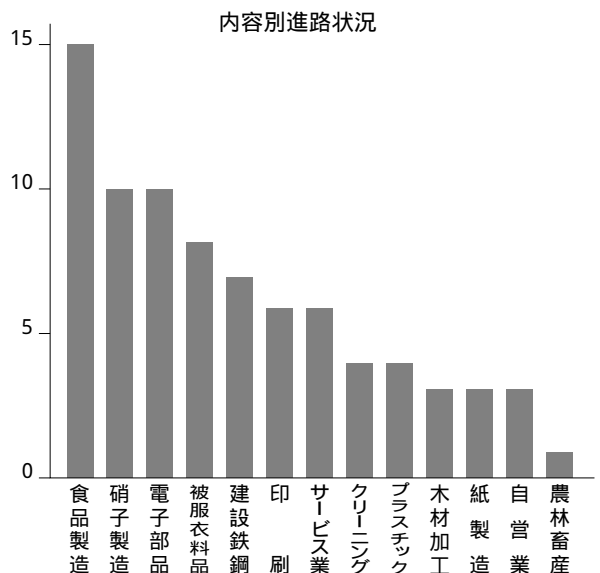
(5) 職員組織

校長	副校長	教頭	主事	教諭	養護教諭	非常勤講師	計
1	1	1	2	22	1	1	29

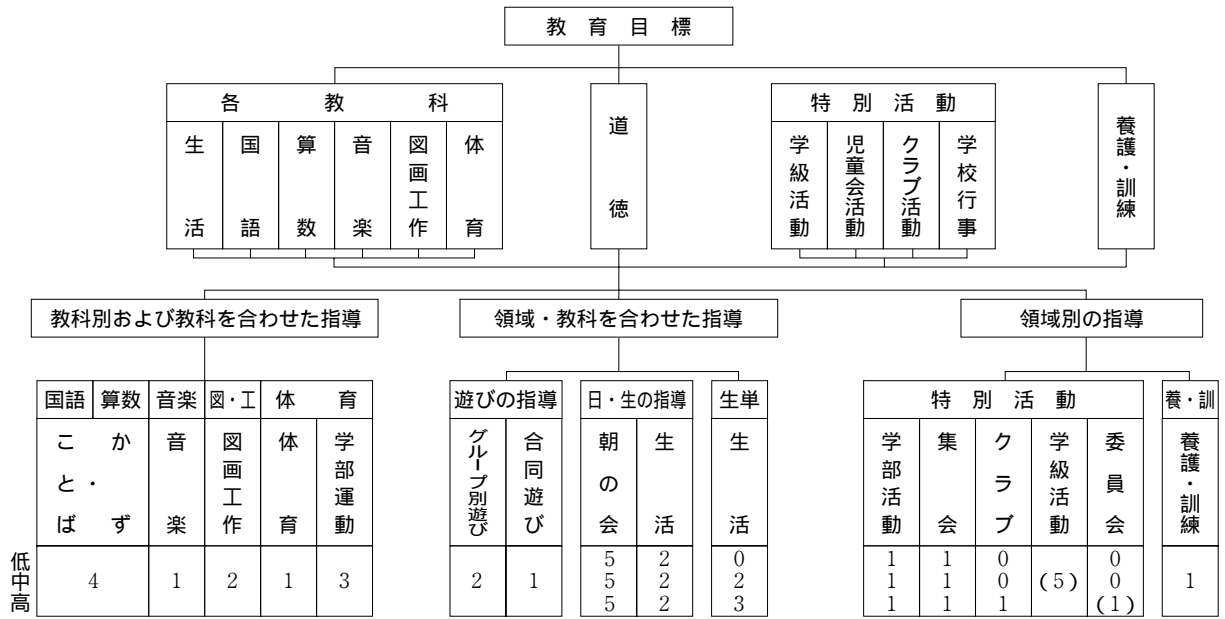
(6) 卒業生の進路

本校の高等部も、平成9年3月までに160名を超え、富山県下のいたるところで活躍している。その進路状況の概略は、以下の通りである。

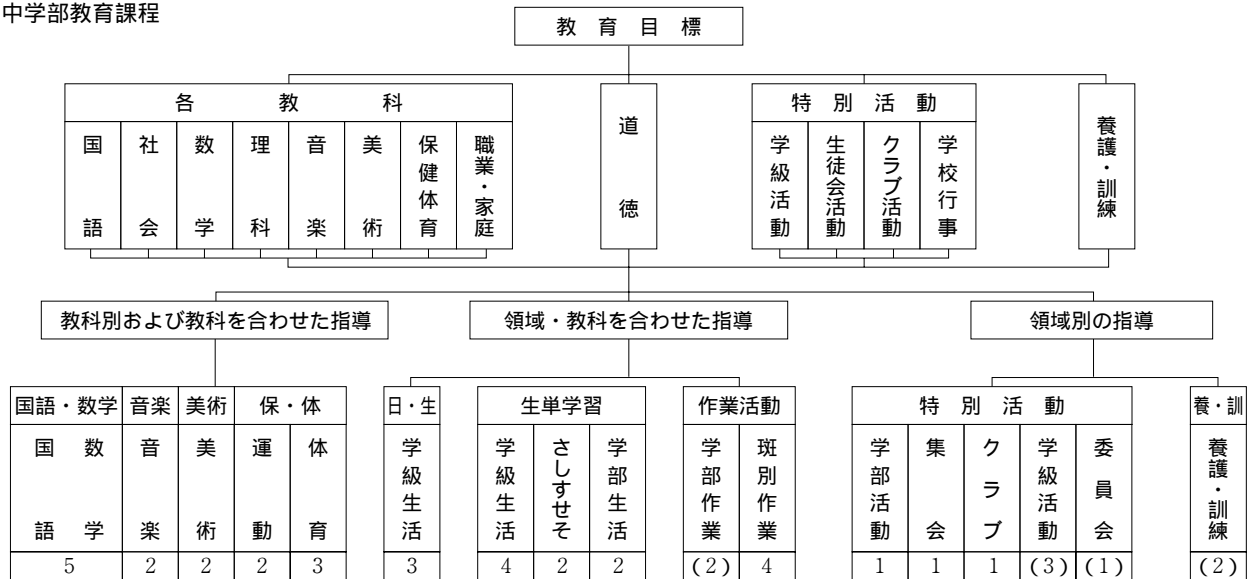
高等部 卒業 生徒数	進 路 先			
	就職	施設	作業所	その他
163	109	11	39	4



教育課程構造図
小学部教育課程



中学部教育課程



高等部教育課程

